「若者たちとの集い　～二度と戦争への道を歩まないために、わたしたちにできること」

＜第１部＞トークセッション
『若者から若者への手紙　1945←2015』翻訳プロジェクト
「70 年の時空を超えて出会う若者たち
～戦争体験を次世代へ、世界へ～」
（登壇者）北川直実・室田元美
（『若者から若者への手紙　1945←2015』著者）

■戦後７０年にあたる年に出版した『若者から若者への手紙　1945←2015』（ころから刊）。まず、本書ができた経緯について説明を行った。

ライター・編集者・写真家の３人で、2006～2015 年に戦争体験者の証言を集め、撮影を行ってきた。

戦争体験者が相次いで亡くなっていく中で、次世代への遺言のようなメッセージをこのままにしておけない。「戦後生まれ」が日本総人口の８割を超した今、どうやって戦争体験を次世代へ伝えていけばいいだろうか・・・試行錯誤した結果、現代の若者に戦時に若者だった戦争体験者の証言を読んでもらい、手紙を書いてもらおうということにした。

なぜ手紙という手法を取ったのか・・・。最初は感想文を書いてもらおうと思ったが、まず自分を語り相手とコミュニケーションをはかる手紙のほうが、より深く相手と向き合い、戦争体験を追体験することができると考えた。現在の若者は、７０年の隔たりを飛び越えて、戦時に若者だった戦争体験者と言葉をかわし、それぞれの出会い方をした。

■続いて、『若者から若者への手紙　1945←2015』の中から、千葉県浦安市出身の金子安次さんの戦争体験と、金子さんにあてた若者の手紙を朗読。

金子さんは中国に召集され、戦場で加害と被害を体験している。戦後、金子さんが戦争を振り返り、教訓を平和のために生かしてきたことも知ってほしかった。

■戦後世代が、戦争の記憶を継承していくにはどうすればいいだろうか。

今を生きる私たちが、70 年前の出来事・「体験」を、「昔話」ではなく、自分のこととして、どう“共感”や”想像力”をもって今のこととつなげられるか。

そのひとつとして「自分の暮らす街であった戦争のことを調べてみて知ること、戦争や空襲のあったその現場に立って見る」ことを提案。

たとえば「千葉市空襲と戦争を語る会」伊藤章夫さんの案内で行くフィールドワークなどは「自分につながる歴史の中に確実にあった戦争を、自分の生まれ育った街だからこそ実感できる」。ひとりひとりの名前が刻まれている千葉市空襲の「平和祈念碑」は犠牲になった 700 名一人ひとりの命の重さを伝えるもの。新しく身元の分かった人がいると加えていく。「碑そのものが生きている」からだと案内の伊藤章夫さんは言う。千葉市内にはたくさん戦跡があり、戦争体験を継承していく取り組みや模索も素晴らしい。

■最後に、新たな挑戦：国境や文化の境を超えて世界へ発信する「翻訳プロジェクト」についての報告。

現在、戦争体験者と若者たちが交信した『若者から若者への手紙　1945←2015』を英訳し、世界に届ける「翻訳プロジェクト」を始めている。現代の世界でも戦争は続いており、戦争の体験や教訓は普遍的に世界へ伝える価値がある。

翻訳チームにはさまざまなルーツやバックグランドを持つ 10～20 代の 15 人が参加。翻訳以

外にも映像・会議のコーディネイト・通訳など自分の得意分野で協力をと申し出てくれたメンバーと何ができるか検討中。SNS で世界の若者と交流、国際シンポジウムの開催など、アイデアが出ている。多くの方に「翻訳プロジェクト」に賛同し、協力してもらいたいと願っている。

■登壇者プロフィール

・室田元美　Motomi Murota――――――ライター

神戸市出身。広告や女性誌のライター、FM ラジオの構成作家などを経て、2004 年から戦争や東アジア近現代史について取材活動や執筆を続けている。全国に遺されている、アジア太平洋戦争の戦跡と歴史を受け継ぐ人たちを訪ねてまとめた『ルポ 悼みの列島　～あの日、日本のどこかで』（社会評論社）で 2010 年「第 16 回平和・協同ジャーナリスト基金賞 奨励賞」受賞。著書に『いま、話したいこと～東アジアの若者たちの歴史対話と交流』（子どもの未来社）、共著に『戦争のつくりかた』（マガジンハウス）他。

・北川直実　Naomi Kitagawa――――――編集者

千葉市出身。JAL 機内誌「ウインズ」編集部チーフエディターを経てフリーに。2001～04 年「スプリングボード」（青年海外協力協会発行）編集長・編集委員。現在は主に単行本を企画・編集。“戦争の記憶と継承”をテーマにした作品に『難民と地雷』（小林正典著／草土文化）、『忘却に抵抗するドイツ』（岡裕人著／大月書店）、『いま、話したいこと』（室田元美著）『「ホロコーストの記憶」を歩く』（石岡史子他著／以上 2 冊子どもの未来社）等。稲毛海岸の「カフェどんぐりの木」を本拠地に「よりみちカフェ」を仲間とともに主宰。昨年フィールドワーク「千葉空襲・戦跡を歩く」を企画。（http://dongurinoki.info）

<第 2 部>パネルディスカッション

（テーマ）「二度と戦争への道を歩まないために、
わたしたちにできること」

（登壇者）

『若者から若者への手紙　1945←2015』翻訳プロジェクト
翻訳チームメンバーの若者たち

市村かほ（津田塾大学大学院修士 2 年生／ピースアート・プロジェクト「シリア内戦と子どもたち」プロジェクト参加）
権普美（国際基督教大学 4 年生　／通訳・翻訳スタッフとして「ピースボート」に乗船）
上田直輝（早稲田大学 2 年生　／「無国籍ネットワークユース」に参加）
（司会・進行）　北川直実　（「翻訳プロジェクト」実行委員、編集者）

■「『若者から若者への手紙　1945←2015』翻訳プロジェクト」翻訳チームに参加している 3 人の大学生・大学院生をパネラーに迎え、若者たちの生の声を届けた。それぞれ、グループに所属し平和のための活動もしている。①～④について、3 人に話してもらった。

①　「翻訳プロジェクト」以外に、どんな団体に所属し活動をしているのか？そのきっかけは？

【市村】

「アート＝芸術」を通して「ピース＝平和」の種まきに取り組む津田塾大学の学生団体「ピースアート・プロジェクト」に所属している。団体としてはさまざまな活動をしてきたが、「シリア内戦と子どもたち」プロジェクトは、今回私たちが取り組んだもの。中東ジャーナリスト・川上泰徳先生との出会い、SNS を含む多様な媒体を通して、シリア内戦の報道が英語で行われる一方、日本人はそれを主体的に集めるのが苦手と知った。そこで、学生の視点から情報を集め、「子どもの声」を選んで翻訳し、展示として日本語で紹介する活動を行った。

【権】
昨年 2017 年には、半年間休学し国際 NGO「ピースボート」の船に乗船した。広島・長崎の被爆者の方々を始め、中東ジャーナリスト、スリランカの難民弁護士、ジャグリング世界チャンピオンの言葉を通訳・翻訳しながら世界一周の冒険に出た。人と人、文化と文化をつなぐ架け橋としての翻訳・通訳を仕事にしながら、世界中を旅して知見を広げられるチャンスを利用し、いまやらねばいつやる！と思い、20 歳のときに、初めて日韓共同で運行するクルーズに乗ったことがきっかけだった。
最近就活を終え、LIVESTRONG 財団のグローバルリーダーとして、がん患者やその家族の支援活動に取り組んだり、世界で開かれる国際会議・学術会議で発表をしたり通訳をしたりしている。
【上田】
「無国籍ネットワークユース」という学生団体で活動している。大学の中国語の先生が偶然、「無国籍」に関することを専門としており、今年 3 月にマレーシア・ボルネオ島のタワウにフィールドワークをしに行くと伺ったことから、クラスのメンバーと共に参加したのがきっかけ。普段は日本にいる無国籍の人を知る機会を設けて実際に話を聞いたり、マレーシアでのフィールドワークの内容を発表したりするなどして、無国籍に関する知識を高めるとともに、その情報をアウトプットできるようにしている。

② 「翻訳プロジェクト」やその他の活動を通して、今の日本や世界がかかえる課題は何だと思うか？
【市村】
シリア内戦に対する日本人の関心は決して高くはない。活動に参加する前の私もそうだった。しかし、空襲下の日本で起こったようなことが、７３年たった今なお、シリアでも起こり続けている。「戦争は本当に終わったのか？平和とは？」国や時代の枠を超えて問い続けること、そして「戦争」をもっと自分と結び付けて考えることが必要だと思う。
【権】
同じ人類であることを忘れているほど、世界で今何が起こっているかに対して、無知・無関心である状況、そして頭で理解することに精一杯になってしまい、素直に心で受け止める余裕を忘れている現代人が多いのではないか。忙しすぎて、心のゆとりがなく、人に対して気配りや関心が持てない状況に置かれている気がする。ローカル・グローバルで、日々溢れかえるニュースや言葉から、何が大事か本質を知ろうとすることが大事だと私は思う。しかし、一人・一集団のマイノリティを攻撃して非難したり、自らの言い訳ばかり考えて過ちを認めない・謝れない社会はおかしい。日本も世界も、国家レベルを離れて、人間は間違って当然であるから、いかにして同じ過ちを繰り返さないか、互いの失敗や成功の知恵を共有し、より良い社会へと目指すべき。
【上田】
一番感じた課題は、若者の知識量および物事に対しての興味が非常に低いこと。そして世界に存在する様々な問題について知る機会が少ないことであると感じた。自分自身戦争について考える機会は普段あまりなく、このプロジェクトは戦争や平和について考える良い機会となった。このような機会をもっと多くの若い人々が得て、世界の問題を認知して行くべきだと思う。

③ 友達と「戦争」や「平和」のことについて話をすることはあるか？　友達の反応・考えは？
【市村】
友人と話すことは正直あまりない。「日本は平和」という言葉はよく聞くが、多くの人はそれ

を疑うことなく信じていて、「戦争」を自分とは関係のない問題として捉えている気がする。私は、このプロジェクトに参加するようになって、メンバーと一緒にシリアや戦争に関する映画を観たり、「平和」と「戦争」について話したりするようになった。きっかけや話しやすい環境があれば、自分なりの考えを持って声に出していくことができるのではないかと思う。

【権】

幸いにも「戦争・平和・人権」などに関して議論することが大事だと思っていて、自分なりの意見や体験談を具体的に持っている若者が私の周辺には多いと思う。しかし、日本の電車の中で若者がこうした話題について、オープンに話す風景はまだみられない。

私の周りの学生は議論をするだけでなく、実際に戦争地を訪れて、現地の人の話を伺ってみようと行動する人もいた。例えば、カンボジアのクメルルージュ、ツチ族とフツ族のルワンダ虐殺、ドイツのナチス党によるホロコーストの歴史、韓国やアジア諸外国の慰安婦問題を知りたいと思い、スタディーツアーを自主的に企画することもあった。

【上田】

正直な話、友達と戦争や平和について話すことはない。そもそもそういう機会が少ないように感じられる。わたしは幸い太平洋諸島について学ぶ授業を通してクラスメイトと意見を交わすことがあるが、そもそも自分たちが知らない日本の戦争に関しての事実や歴史を学ぶことに驚くことが多い。それと共に知識不足を痛感する。

④ 私たち（自分）は何をしたらよいと思うか？　参加者に伝えたいこと。

【市村】

人間は、過去から学び、それを未来へ活かす力を持っていると思う。そのために、１番大切なのが「伝える」こと。私は実際に戦争を体験したわけではない。それでも、「翻訳プロジェクト」を通して体験者の声を「伝える」お手伝い、そして自分の経験と結びつけて自分の立場から考えた「戦争」への思いを「伝える」ことをしていきたい。

【権】

わからないと素直に認めることから始めて、わからないことに「どうして？」「なぜ？」と疑問を持つこと。問いかけを自分だけ無関心だから面倒だからと解決せず、周りに共有して話し合ってみたり、一緒に調べ学習をしたり、勉強会に参加してみたりと、「知ってみよう！」とアクションに移して見ること。真実が何か、多様な考え方や立場があることを自覚した上で、想像力を働かせて、学ぶこと。言葉の重みを理解し、発信する側に立った時は、慎重に言葉を選び、責任を持つこと。間違えたと考えたら訂正することも恥ではないと知ること・実践すること。

【上田】

まずは知る事、そして意見を持つことが非常に大事になると思う。例えば、戦争に対して自分がどのように思うのかよくわからなければまずは過去に起きた戦争について知らなくてはならない。そのプロセスの中で自分自身の知識量が増えて、結果自分の意見が固まる。そしてその意見を立場が違う様々な人と交わすことによって、より良い社会が作られて行くのではないかと思う。

■③と④の間で、途中３０分間、会場からも発言をお願いした。戦争体験者の方 3 名、戦争体験者のお子さん、お孫さん、3 人のお子さんを子育て中の 40 代の女性、「翻訳プロジェクト」のメンバーで２０代の高校教諭など、様々な立場、年代の方から、それぞれの体験や想いをお聞きすることができた。また、「憲法改正」についてどう思うかという問いかけにも、若者たちは素直にそれぞれの考えを述べてくれた。

■最後の挨拶：若者たちの声を聞いて、どのように思われたでしょうか？　色々と考えさせられることもたくさんあり、希望を感じた方も多いのでは。「戦争のない世界をつくるために、わたしたちが何をしたらよいのか」という問いに対する答えはひとつではないし、すぐに答えが見つかるものでもない。今回のように色々な人と対話することは、その第一歩になるだろう。今日はそういう意味で、さまざまなルーツやバックグラウンド、そして立場の異なる，いろいろな方から意見をうかがえて、実りの多い時間だったのでないか。

この問題は、次世代の若者たちにだけ押し付けるべきものでもない。すべての世代の人たちが考えていくべきもの。これからも、いろいろな場所で、平和のための対話が行われることを願っている。みなさんもお仲間とぜひ、この続きを始めていただきたい。

私たちは、この 3 人もふくめた若者たちと「翻訳プロジェクト」をかたちにし、頑張っていきたいと思うので、これからもぜひ応援をお願いしたい。

＜「ピースフェア」に参加して＞

【市村】

一緒に登壇した２人も含め、ピースフェアに参加した人たちは、みなさん年齢に関係なく、自分の経験や立場から「戦争」に対するそれぞれの思いを持っていることが伝わってきた。そうした方々と話す中で、「戦争」を多面的に考え直す機会となった。また、ピースフェアに参加することで、自分の思いをたくさんの人に伝えられたことがうれしかった。

【権】

私を何かとレッテルを貼るのではなく、「一人の個人・若者」としてみてくれて、率直な感想や建設的なフィードバックをくださった参加者の一人一人に感謝します。平和とは何か、戦争とは何か、人権とは何か、歴史とは何か。全て繋がっている人類の歩みを今一度知ろうと思い、学びをどんどん人に発信して、積極的にシェアしていきたいと思います。ソクラテスのいう「無知の知」をさとりつつ、生涯謙虚に学び続け、学びを共有し続けられる人生を過ごしていきたい。社会人になって、学生でなくなったから勉強しなくなるのではなく、消費者から生産者側へと回る自覚を持って、地球平和に貢献できるよう、社会へよきインパクトを与えられる人間になりたいと改めて思った。

【上田】

普段生活していて、自分自身が戦争について考える機会はあまりなく、このような機会をいただけて本当にうれしく思う。それに加え、年代や立場の違う様々な人々の意見を聞き、新たな見方を学ぶこともできた。より多くの若者がこういった機会が得られると良いと思った。

【室田】

千葉のピースフェアに初参加させてもらった。地域で共有する歴史の中に、空襲など庶民が巻き込まれた「戦争」があり、千葉市内にあるいくつかのモニュメントとともにこうしてピースフェアで毎年、戦争が体験者から戦争を知らない若い世代に引き継がれているのは、しなやかな「力」だと思った。

ピースフェアは世代をつなぐコミュニケーション力が発揮される場であり、さらにいえばこうして顔を合わせ、語り継ぎ、ともに平和について考えることこそが、私たちが二度と戦争を繰り返さないための確かな「抑止力」になるのではないだろうか。

会場を取り巻く多彩な展示、ゆったりと設けられたステージと客席、スタッフの方々が長年積み上げてこられた、ていねいな運営にひたすら感じ入った。私たちに貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。今後も若い世代やファミリーの参加を期待したい。戦争に限らずともおのおの生きるうえで大切にしていることを持ち寄る企画などもいいと思う。

【北川】

戦後 73 年目を迎え、戦争体験者の方たちが年々いなくなっていくなかで、「戦争体験をいかに次世代に継承していくか」は昨今直面している課題である。その答えを見つけるために、今回企画したのが「若者たちとの集い」だった。私たちの「**『若者から若者への手紙　1945←2015』翻訳プロジェクト**」の取り組みを通して、「今を生きる若者たちは戦争をどう捉えているのか」――彼らの生の声を聞いていただきたいと思った。

その期待に応え、登壇した 3 人の若者はのびのびと、素直に、世界の人々とふれあいながら感じていること考えていることを、語ってくれた。今も世界には戦争を生み出す問題が山積している。簡単には解決できないことばかりだが、そのなかで、自分のできることを真剣に考え、動き出そうとしている彼らに、学ぶことは大きい。「二度と戦争への道を歩まないために」、私たち市民にもできる小さな一歩があるのではないだろうか。

一方で、若者は多忙である。就活、大学の定期試験、留学準備の合い間をぬって参加してくれて有難う。

「自分の思いをたくさんの人に伝えられたことが嬉しかった」「多くの若者にこういう機会が与えられると良いと思う」と語っている。今後も、若者たちの参加、異世代・異文化間の交流の場が増えることを願っている。

生まれ育った千葉で、市民が中心となって続いてきた「ピースフェア」があることを、遅まきながら、はじめて知った。今回このような発表の場をいただいたことにも心より感謝したい。地域や人との繋がりを大切にしながら、平和の種蒔きをされてきた諸先輩方に出会えたことも大きな喜びである。次回は「翻訳プロジェクト」の成果と英語版の完成を報告に来たいと思う。できることならば、日々成長を続ける若者たちと一緒に。

6 月 17 日（日）千葉日報で当日の様子が紹介されました。

戦争体験語り継いで

中央区　平和を考える集い

平和について考えを語る北川さん（左端）と大学・大学院生ら＝16日、中央区のきぼーる

中央区のきぼーるで開かれている「千葉市平和のための戦争展」で16日、平和について考える「戦争を繰り返さないための集い」が開かれた。戦争体験者の証言とそれに対する若者の手紙を収めた本「若者から若者への手紙」の著者2人や大学・大学院生が、戦争体験を受け継ぎ広めていくことの大切さを語り合った。

同本の著者、北川直実さんと室田元美さんは「戦争体験者の遺言のようなメッセージを、次世代にどう伝えていくか。現代の若者に1対1で向き合ってもらうために手紙を思いついた」と本制作の経緯を説明。戦争の記憶の継承には創造力が必要と訴え「地元の戦跡を知ることで、戦争のリアリティーを実感できる」と呼び掛けた。

本の証言などを英訳して電子書籍で世界に発信するプロジェクトが始まっており、参加する学生3人も登壇。海外経験が豊富な3人は「平和と豊かさはイコールではない。他人を思いやる気持ちが重要」「友人と平和や戦争について話す機会が少ない。日本は平和慣れしている」などと意見を出し合った。

岩手県大船渡市出身の市村かほさん(24)＝津田塾大大学院2年＝は東日本大震災の経験を踏まえ「私たちのまちは過去の教訓を守っていたおかげで、被害が少なくてすんだ。過去から学び教訓を伝えていくことが、未来の命を守ることになる」と強調した。

同戦争展はきょう17日まで開かれている。

東京新聞８月４日夕刊

平和のバトン 国境超えて

元兵士ら証言と現代若者の手紙

学生ら英訳、来春電子書籍化へ

つなぐ 戦後73年

戦争体験者の証言などが収められた「若者から若者への手紙　1945←2015」

太平洋戦争の元兵士らの証言と、現代の若者が戦争体験者に宛てた手紙をまとめた書籍の英訳が進んでいる。来年二月の電子書籍化を目指しており、著者の一人で編集者北川直実さん(ぺ)＝千葉県習志野市＝は「国境や世代を超え、戦争の悲惨さや平和の尊さのメッセージを届けたい」と話している。（中山岳）

書籍は「若者から若者への手紙　1945←2015」（二〇一五年出版）。元兵士や東京大空襲の被害者ら十五人の証言と、証言を知った現代の十～二十代の十五人がつづった手紙が盛り込まれている。写真家落合由利子さん(ぺ)、北川さん、ライター室田元美さん(ぺ)の共著で、十年がかりの取材の成果だ。

戦争体験者のうち、長生郡東郷村（現千葉県茂原市）出身で一四年、九十歳でなくなった篠塚良雄さんは、日中戦争下、旧満州（現中国東北部）のハルビンで、細菌兵器の研究開発を進めた「七三一部隊」の少年隊員だった。

篠塚さんは、捕虜らの人体実験に関わったことを悔やみ、「戦争は基本的に人命軽視。わしたちは、（上官に）命ぜられればその通りに動くロボットにさせられた」と証言している。

「海外で読まれるよう翻訳したら」。読者から意見が寄せられ、北川さんらは昨年、英訳を決定。戦争体験者の証言の英訳はプロの翻訳家が担当し、若者の手紙は日本人、日系ペルー人、韓国人など多様な境遇の十～二十代の学生や社会人が手掛けることになった。

パネルディスカッションで語る北川直実さんをや、早稲田大２年の上田直輝さん（左から２人目）ら＝６月、千葉市で

英訳に参加した早稲田大二年の上田直輝さん(ぺ)は、篠塚さんの証言を読み「当時の若者は『国のためなら戦争は間違いではない』と教育を受けていた。戦争を知る努力を続け、自分の意見を持つことが必要だと思った」。津田塾大大学院二年の市村かほさん(ぺ)も「戦争の教訓を学び、今の世代が生かす大切さを痛感している」と話す。

北川さんや上田さんらは、六月に千葉市で開かれた「平和のための戦争展」のパネルディスカッションで、英訳への思いや戦争体験者の記憶を次世代につなぐ大切さを語り合った。英訳に参加した若者らが、戦争体験者へ新たに手紙を書く計画もあるという。

室田さんは「英訳を通じ、若者が戦争体験者の生き方に向き合ってほしい。今後も戦争について考え、世代や国境の垣根を越えて話し合ってもらえればいい」と話している。

北川さんらは電子書籍化の資金の寄付も募っている。問い合わせは、出版社「ころから」＝電03（5939）7950、Eメール＝office@korocolor.com＝へ。